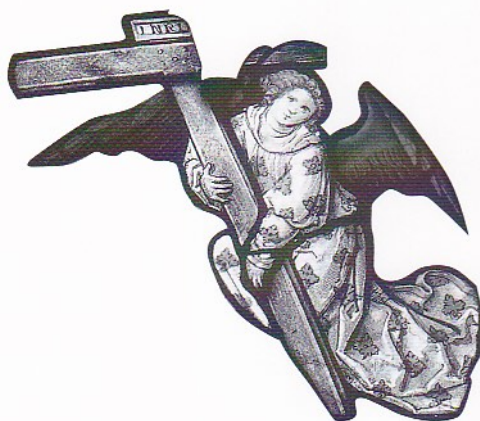




Johann Sebastian Bach
MATTHÄUSPASSION
BWV 244



⁰³11月30日(日)15:00 盛岡市民文化ホール大ホール

主 催：盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

助 成：財団法人 ロームミュージックファンデーション

後 援：岩手県教育委員会、盛岡市教育委員会、盛岡市文化振興事業団、岩手県合唱連盟、岩手日独協会、NHK盛岡放送局、岩手日報社、盛岡タイムス

⁰³12月3日(水)18:30 ザ・シンフォニーホール

主 催：大阪新音

後 援：朝日放送

⁰³12月5日(金)18:30 東京オペラシティコンサートホール

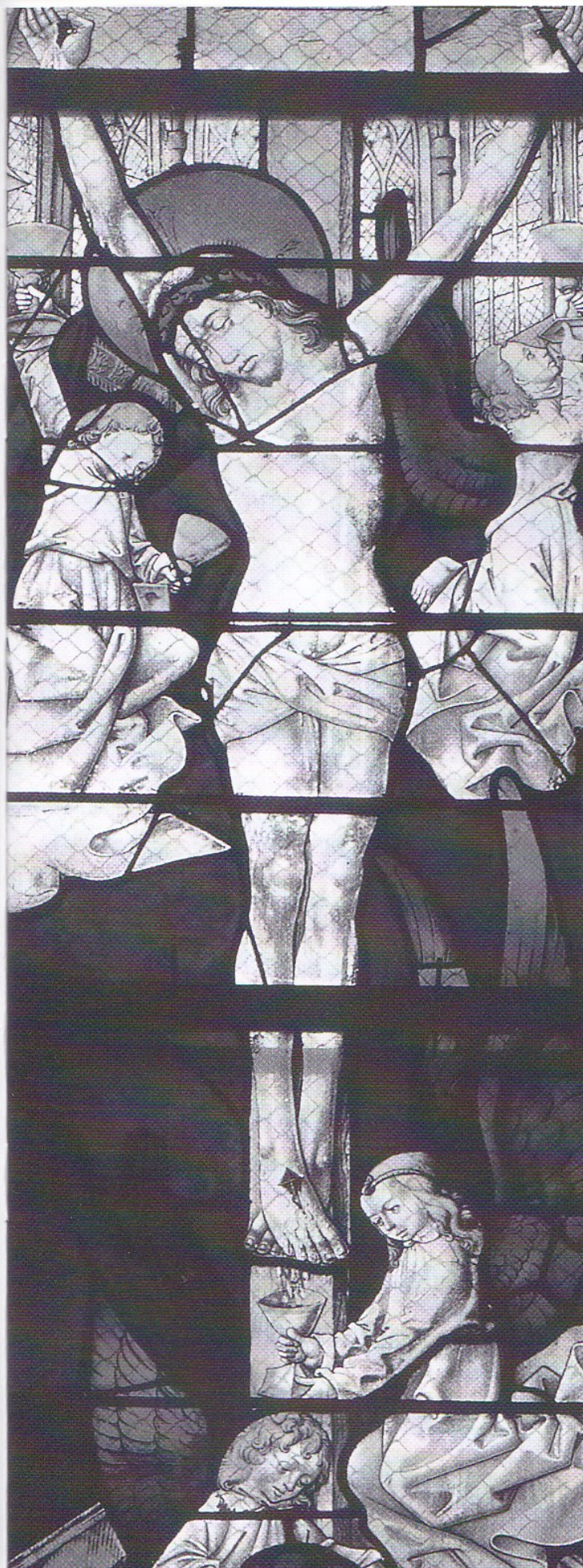
主 催：国 梶本音楽事務所

後 援：ドイツ連邦共和国大使館/MUSIC BIRD・TOKYO FM

協 力：ナミ・レコード

招聘・提供：国 梶本音楽事務所

Presented by KAJIMOTO CONCERT MANAGEMENT CO.,LTD.



Johann Sebastian Bach

マタイ受難曲

Matthäusp passion BW V244 (日本語字幕付)

ドイツ・バッハゾリステン
ヘルムート・ヴィンシャーマン/指揮

第1部 (約70分)

第1曲……………導入の合唱(ゴルゴタへの道行き)

第2曲～第4曲途中……………受難の予告

第4曲途中～第6曲……………ベタニアの塗油

第7曲～第8曲……………ユダの裏切り

第9曲～第13曲……………最後の晩餐

第14曲～第17曲……………オリーブ山上

第18曲～第25曲……………ゲッセマネの園

第26曲～第29曲……………イエスの捕縛

休憩 (20分)

第2部 (約90分)

第30曲…イエスの行方を案じて探すシオンの娘とエルサレムの娘たちの同情

第31曲～第37曲……………カヤバの審問

第38曲～第40曲……………ペテロの否認

第41曲～第43曲途中……………ユダの最期

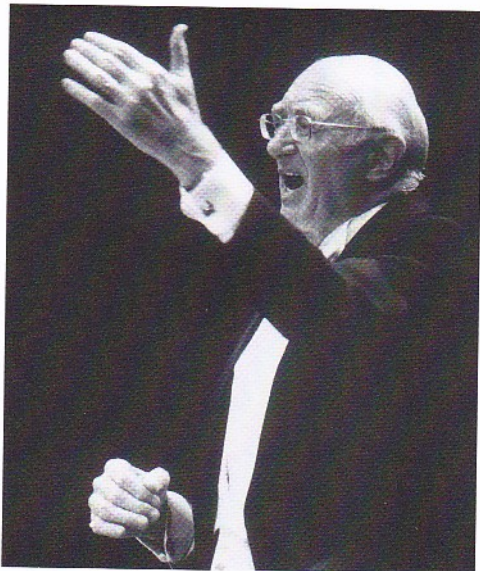
第43曲途中～第54曲……………ピラトの裁判

第55曲～第60曲……………十字架の刑

第61曲～第63曲途中……………イエスの死

第63曲途中～第68曲……………埋葬

DEUTSCHE HELMUT BACHSOLISTEN WINSCHERMANN



ヘルムート・ヴィンシャーマン(指揮)
Helmut Winschermann

1920年3月22日ドイツのルール地方ミュールハイムに生まれた。エッセンとパリで学び、ヘッセン(フランクフルト)放送交響楽団、コンセルトヘボウ(アムステルダム)などのソロ・オーボエ奏者を務めた。その他、数々の室内楽団のリーダーを経て、1960年フランクフルトにおいてドイツ・バッハソリストを創立。以来、芸術監督として、今日まで30余年全責任を持ち、この室内楽オーケストラを独特のスタイルを持つアンサンブルに育て、特にバッハ演奏において世界的に権威ある演奏団体にした。ヴィンシャーマンは、オーボエを手にしても、指揮棒を握っても、ステージに立つときは、常に、「明晰に、生き生きと、喜ばしく」という彼のモットーを貫いてきた。

ドイツ・バッハソリストのメンバーは、初めからヴィンシャーマンの芸術と人格を慕って集まってくる、著名なオーケストラの首席演奏者や音楽大学の教授である彼の友人たち、およびその優れた弟子たちで構成されている。年配者と若い世代がバランスよく混ざり、メンバーも固定でないために、マンネリ化が避けられ、常にフレッシュな空気がアンサンブルにもたらされている。

音楽監督としては「フランクフルト・バッハ演奏会」(20年間)、ケルン・バッハ協会の「オーケストラ演奏会」(7年間)などを手掛け、1983年からはリューデンシャイツ市で、市とドイツ政府の援助のもとに「リューデンシャイツ・バッハ週間」を主宰している。ドイツ・バッハソリストを率いて、あるいは客演指揮者として世界各地での演奏会のほか、地元のボンのベートーヴェンホールやケルンのブリュール城でも定期的にコンサートを開いている。

日本では、1962年以来ドイツ・バッハソリストとの来日以外に、客演指揮者としていくつかの日本の合唱団やオーケストラを指揮し、合唱を伴う教会音楽—バッハ「マタイ受難曲」「ヨハネ受難曲」「カンタータ」「クリ

スマス・オラトリオ」、ヘンデル「メサイヤ」などでも、友人のクルト・トーマスに学んだ指揮法を駆使して特筆すべき成果を上げている。また、種々の音楽祭や公演で熱心な指導を行っており、日本の若い音楽家が彼から受けた影響は少なくない。

一世を風靡した名オーボエ奏者として知られる一方、ヴィンシャーマンは優れた教育者としても知られ、1956年デトモルト国立音楽大学の教授に就任。オーボエと室内楽のマスタークラスを受け持ち、「歌うオーボエ奏者」と称される彼のクラスには世界各地から学生が集まり、優秀な後継者が輩出した。ハンス・イェルク・シェレンベルガー(ベルリン・フィル)、宮本文昭(ケルン放送響)、インゴ・ゴリツキ(シュトゥットガルト国立音楽大学)、ゲルノート・シュマルフス(デトモルト国立音楽大学)、リヴィオ・ヴァルコール(フランクフルト放響)など、それぞれのオーケストラの首席オーボエ奏者または大学の教授として活躍している。

『ブランデンブルク協奏曲』『音楽の捧げもの』『フーガの技法』などのバッハのオーケストラ作品の大作が近年のヴィンシャーマンのプログラムの中心を占めているが、その他に、モーツァルトのピアノ協奏曲、セレナーデ、バレエ音楽、メンデルスゾーンのパレエ音楽など、ますます意欲的にレパートリーを広げており、特にモーツァルトのレコード録音に対しては、最上の評価を得ている。

また、著名な作曲家、ギゼルヘア・クレーベは、ヴィンシャーマンとドイツ・バッハソリストのために『ストラヴィンスキーの墓』という曲を書き、献呈している。

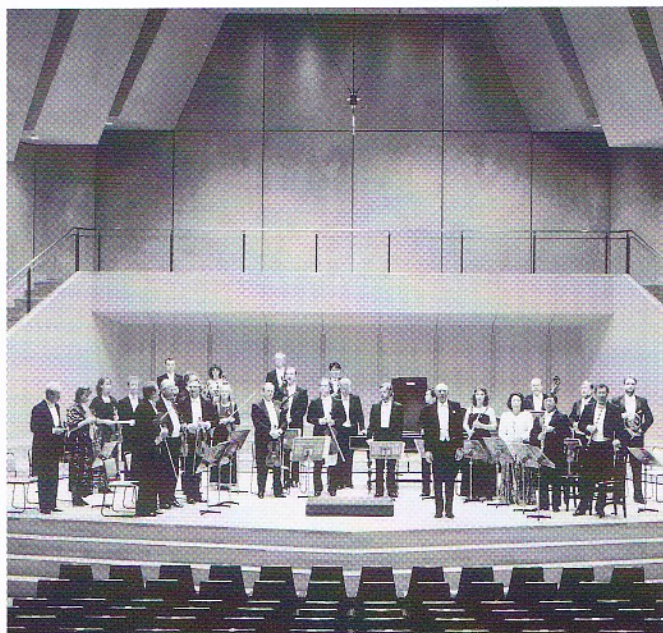
最近の公演評は、彼のモダン楽器によるバッハ演奏を高く評価している。日本やヨーロッパの大きなホールでは、モダン楽器を用いた方が聴衆はバッハの音楽をより理解することができるだろう。古楽器は素晴らしいが、その魅力的な響きはヨーロッパの城にあるような小さなホールでこそ生かすことができる。ドイツ・バッハソリストのメンバーたちは古楽器の演奏にも通じている。ちょうどヴィンシャーマンが10年にわたってバロック・オーボエを演奏したように。

音楽学者でもあるヴィンシャーマンは、多くのバロック音楽の楽譜をジコルスキ社より出版、またレコードはドイツ・グラモフォン、ベレンライター、フィリップス、RCAなどより50枚以上出している。なお、バッハソリスト結成以前にバロック・オーボエも演奏していた彼は、ドイツで最初のパロック・オーボエによるレコード録音を行っている。近年では、CDでフィリップス、カプリチオ、インターコードなどよりバッハの協奏曲、ヘンマン・ブライ、エディタ・グルベローヴァとのカンタータなどがリリースされている。

ドイツ政府より最高の一等功労十字勲章、レコードに対して権威あるエディソン賞2回、グスタフ・マーラー賞、1991年度ドイツ・ヘンデル賞など、多くを受賞している。1992年ロンドンで王立音楽アカデミー委員会満場一致にて「名誉会員」の称号を授与された。

1998年1月、ユネスコ本部からの依頼でパリにおいて『平和のためのチャリティーコンサート』を指揮、絶賛を博した。

DEUTSCHE BACHSOLISTEN HELMUT WINSCHERMANN



ドイツ・バッハソリスト
DEUTSCHE BACHSOLISTEN

1962年に初来日した折のドイツ・バッハソリストの演奏は、そのメンバーの豪華さと相まって、未だに語り草となっている感動的なものだった。以降、翌1963年にはクルト・レーデル他のメンバーで、1965年と1970年、1974年には意欲的な「フーガの技法」をプログラムに加えてその絶賛を博し、またその前1972年にはエリー・アメリンクとのカンタータが“管と弦、そして声までが一つの音色感にとけあい、妙なる調和の世界をつくりあげた”と常に生き生きとした躍動感に富むバッハの理想像の名演が好評を呼んできた。

このドイツ・バッハソリストは、オーボエの世界的名演奏家としても著名なバッハ研究の権威ヘルムート・ヴィンシャーマンによって1960年に組織された。ドイツのウルム近郊のヴィプリング修道院で定期的に行われていたフランクフルト・バッハ演奏会の芸術監督もつとめていたヴィンシャーマンは、これを母体に、毎年この演奏会のためにドイツ中から集まってくる第一級の優秀なバロック音楽の演奏家たちによって、文字通りの“バッハ・ソリスト(バッハを得意とするソリストたち)”を結成した。従って、この団体のメンバーは必ずしも固定せず、編成も弦主体だったり2管編成の木管が配されたり、来日のつど異なっておりメンバーも12名から20数名までと自由に構成されている。が、常に指揮者ヴィンシャーマンの深い研究に基づく正統的な解釈による格調高い演奏を行い、その学究的解釈に裏打ちされた生命感と喜悦感に溢れた演奏は、メンバーの変動にも些かも変わらず、「バッハにもっとも忠実に、明るく、楽しく、喜ばしく」というヴィンシャーマンのモットーどおり世界中の人々の心に感動をもたらし、世界のバッハ演奏の規範となっている。

第1オーケストラ

フルートⅠ	ズザネ・ホプファー
フルートⅡ	白尾 隆
オーボエⅠ	リヴィウ・ヴァルコル
オーボエⅡ	ニーナ・ヴァイベル
ファゴット	ヘルマン・ユング
第1ヴァイオリン	アンドレアス・クレヒャー (コンサートマスター)
	マグダ・ヘルマン
	エヴァ・ハイニッヒ
	クラウディア・レンツ
	ドロテー・ラグ
第2ヴァイオリン	カタリーナ・フォーゲル
	フローリアン・パウマン
	ルーカス・シュビットラー
	マルティン・ナゴルニ
ヴィオラ	シュテファン・シュミット
	ディートリヒ・シュナイダー
チェロ	イレネ・ギュデル
	ハルトムート・ベッカー
コントラバス	ヨアヒム・フレック
オルガン	ヴィーブケ・ヴァイダンツ

第2オーケストラ

フルートⅠ	秋山君彦
フルートⅡ	小林 茂
オーボエⅠ	ボリス・バエフ
オーボエⅡ	荒絵理子
第1ヴァイオリン	クラウディア・シュミット=ハイゼ
	ヴェロニカ・ホフマン=シュナイダー
	山田百子
	西野ゆか
第2ヴァイオリン	マグラ・ヴァルコル
	イムケ・グレーヴェ
	林 なな
ヴィオラ	クリストフ・ハレック
	須田祥子
ヴィオラ・ダ・ガンバ	福沢 宏
チェロ	トーマス・シュルツェ
	ズザネ・シュルツェ
コントラバス	都筑道子
チェンバロ	ミドリ・ノジリ=ヴィンシャーマン



ニルス・ギーゼッケ
(テノール/エヴァンゲリスト)
Nils Giesecke, Tenor (Evangelist)

1950年ライプツィヒに生まれ、有名なライプツィヒ聖トーマス合唱団で歌う。ライプツィヒ音楽大学でエーファ・シューベルト教授に、ドレスデン音楽大学でヨハネス・ケンプター教授に声楽を学ぶ。

1980年ライプツィヒで開かれたJ.S.バッハコンクール、1981年ゲラで開かれた新人オペラ歌手コンクールに入賞。1980年以来、リリック・テノールとしてハレ歌劇場と契約を結び、75回以上の公演に出演。さらにライプツィヒ歌劇場、ドレスデンのゼンパーオーバーへの定期的な出演など客演も数多く行っている。オペラの主なレパートリーとしては、モーツァルトの《後宮からの誘拐》のベルモンテ、《ドン・ジョヴァンニ》のドン・オッターヴィオ、《魔笛》のタミーノ、ヴェルディ《椿姫》のアルフレード、プッチーニ《ラ・ボエーム》のロドルフォなどが挙げられる。

宮廷歌手の称号を授与され、オラトリオやコンサートの歌手としても活躍、ライプツィヒ・バッハ音楽祭、ドレスデン音楽祭、ハレ・ヘンデル音楽祭などに度々出演している。レパートリーは、ヘンデルの数多くのオラトリオ、バッハの様々な声楽作品、ハイドン《天地創造》《四季》、モーツァルトの主要作品、ベートーヴェン《荘厳ミサ》《第九》、シューベルトのミサ曲、メンデルスゾーンとブルックナーのオラトリオ、ドヴォルザーク《スタバート・マーテ》《レクイエム》など非常に幅広い。

この他、ライプツィヒ聖トーマス合唱団やドレスデン十字架合唱団とのコンサート、ヨーロッパ各国や日本への演奏旅行、ラジオ、テレビ、レコーディングなど、多方面にわたって活躍を続けている。



三原 剛
(バリトン/イエス)
Tsuyoshi Mihara, Baritone (Jesus)

大阪芸術大学卒業。卒業時に、演奏学科長賞受賞。1991年第22回日伊声楽コンクール金賞受賞。1992年第61回日本音楽コンクール第1位、同時に増沢賞、福沢賞、木下賞、松下賞を受賞。翌93年には、第4回五嶋記念文化賞オペラ新人賞を受賞し、後に五嶋記念文化財団奨励学生としてドイツのケルンに留学する。

ドイツでは、ベルリン、ライプツィヒでバッハのカンタータ演奏会に出演、ベルリナー・ポスト紙上に絶賛される。また1995年には、ドイツ・ハーゲン歌劇場でヴェルディ《トロヴァトーレ》のルーナ伯爵役を演じ大成功を収める。

国内でも、リリング指揮《ヨハネ受難曲》、ヴィンチャーマン指揮《マタイ受難曲》《ヨハネ受難曲》をはじめ、バッハ、ヘンデルなど、バロック期の宗教音楽を中心に多数の演奏会に出演。さらに、国内主要オーケストラとの共演で、モーツァルト、ハイドン、ベートーヴェン、ブラームス、フォーレ、ヴェルディ、プッチーニ、マーラー、オルフ、ニールセンなどを歌い、古典派、ロマン派、近代・現代作品へと着実にそのレパートリーを拡げている。

オペラ公演にも意欲的に出演を果たしており、日生劇場《魔笛》(弁者)、「蝶々夫人」(シャープレス)、「フィガロの結婚」(伯爵)、などで好評を博している。2001年には、びわ湖ホールオペラ「アッティラ」においてエツィオ役で出演。朗々たる声のみならず、その役者ぶりでも注目を集めた。

歌曲の分野でも確実な成長を続けており、「稀にみる逸材」「力に満ちた美声の大器」「大型バリトン登場」などこれまでの演奏に対して各紙から絶賛を博している。

他に、第9回新・波の会日本歌曲コンクール第1位及び四家文子特別賞(1992年)、第7回グローバル東敦子賞(1993年)などを受賞。

NHK「名曲アルバム」はじめ、ラジオ、テレビでも活躍。2002年には、NHKニューイヤーオペラにも初出演を果たした。

「木下牧子歌曲集」「アルブレヒト/読響 第九」「秋山/東響 ヤコブの梯子」などのCDに加え、DVD「朝比奈/大フィル 第九」にも参加している。

バリトン・カヴァリエーレ(騎士的バリトン)と評される豊かで気品にあふれる声の持ち主であり、今後の飛躍が大いに期待される。



イングリット・シュミットヒューゼン
(ソプラノ/アリア、第1の女中、ピラトの妻)
Ingrid Schmithüsen, Soprano

イングリット・シュミットヒューゼンは、とりわけ室内楽、リート、オラトリオ、そして現代音楽の演奏に力を入れている。ケルン音楽大学の学生のと時から、このアーヘン生まれの歌い手は、既にこれらのかなり異なった音楽ジャンルと様式をごく自然に調和させていた。声を使って演奏し、実験し、彼女自身の特性を発見し、あらたな己の道をゆく、このことについては、恩師であるグレゴリー・フォレイとディートリッヒ・フィッシャー・ディースカウの薫陶によるところが大きいだろう。

モンテヴェルディからバッハ、モーツァルト、シューベルトを経て、ヴォルフ、ベルク、メシアンをして現代の作曲家にいたるまでのシュミットヒューゼンのレパートリーの広さは、そのCD目録の多彩さにも反映されている。つぎに、そのうちのいくつかを挙げておこう。グスタフ・マーラーの〈大地の歌〉をアーノルト・シェーンベルクが室内楽形式に編曲したもの、デュニス・ブーリヤンのメタ・キャバレ、(Une Soirée Vian)の初演、そしてアンサンブル・アディユと共演したボッケリーニの〈スターバト・マーテル〉の録音などである。

イングリット・シュミットヒューゼンは、多くの音楽家たちと長年にわたって芸術的なコラボレーションをつづけている。ピアニストであり室内楽奏者でもあるトマス・バルム、オーリン・クワルテット、アディユ弦楽四重奏団、ヴィンツバッハ少年合唱団と指揮者のカール・フリードリヒ・ベリンガー、ヘルマン・マックスとクライネ・コンツェルト・アンサンブル、チェンバリストでハンマーフルーゲル奏者でもあるゲラルト・ハンピッツァー、アンサンブル・モデルン、アンサンブル・ケルン、アンサンブルSMCQ(ケベック現代音楽ソサエティ)と指揮者のヴァルター・ブードローなどが、主な共演者である。また最近、種々の音楽祭での活躍にもめざましいものがある。アルス・ムズイカ(ブリュッセル)音楽祭におけるアントワヌ・ボネとヴォルフガング・リームの作品の演奏、ドレスデン音楽祭におけるルイス・アンドリーセンの作品(ピーター・グリーナウェイ監督の映画(M is for Man, Music Mozart)のための作品)の演奏、ウィーン音楽週間におけるミハエル・リースラーの作品の初演、アンツバッハでおこなわれたバッハ週間におけるバッハのカンタータ。また、バッハとハイドンの作品はオーストラリアと台湾へのツアーでも演奏している。

2002年/2003年シーズンには、数多くのリート演奏会が予定されている。なかでも注目されるのは、クルターク、ベートーヴェン、マーラーの歌曲をうたうボン・ベートーヴェン音楽祭のオープニング・コンサートである。さらには、バッハのマタイ受難曲をスペインへのコンサート・ツアーで歌う予定である。また、ライブツィヒ聖トマス合唱団との演奏会もおこなわれる。CD録音は、ピアニストのジェイムズ・マドックスと、バッハの〈アンナ・マクダレーナのためのピアノ帖〉、ヴィンツバッハ少年合唱団との共演でバッハのカンタータが予定されている。



マルティン・ヴェルフェル
(カウンターテナー/第2の女中、第1の証人)
Martin Wölfel, Alt

ポツダムの芸術愛好家の家庭に生まれ育つ。俳優を志してベルリンのブッシュ演劇学校に入学を許可されるが、演劇の重要な基礎として声乐を学ぼうとドレスデンのカール・マリア・フォン・ウェーバー音楽学校を受験して見事合格する。テノールの声域に限界を感じながら勉強を続けるうちに、アクセル・ケーラーのリート・コンサートを聴いてカウンターテナーへの転向を決意、マルグレート・トラッペ・ヴィール、ポール・エスウッド、アクセル・ケーラー、ジェシカ・キャッシュ、ブリギッテ・ファスベンダーなど、この分野の第一人者のマスターコースを専攻し、同時に活発な演奏活動も開始する。

これまでに、ライブツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団、ストックホルム・ドロットニングホルム・バロック・アンサンブルなどと共演し、今後、シュトゥットガルト・バロック・オーケストラ、ドレスデン・バロック・オーケストラ、ベルリン・アンサンブル・オリオール、ドイツ・バッハポリステンなどとの演奏を予定している。多くの国際音楽祭にも出演して人気を博している。

バロックのシリアスなオペラや現代音楽でもカウンターテナーの重要性が増すなか、オペラでも活躍。2001/2002年シーズンは、ヘンデル《ペレニーチェ》のアルサーチェ(ヘンデル音楽祭、カールスルーエ国立劇場)、ジョン・ラン《侍女たち》のクレール(ドイツ初演、ドレスデン・ゼンパーオーバー)、2002/2003年シーズンは、モンテヴェルディ《オルフェオ》(ライン・ドイツ・オペラ)などに出演、2002年6月には、マンハイム国立劇場にプリテン《夏の夜の夢》のオペロンでデビューした。

2003年は、年初にサー・ネヴィル・マリナー指揮アカデミー・オブ・セント・マーティン・イン・ザ・フィールズのバリ、デュッセルドルフ、ケルン、ミュンヘン公演でヴィヴァルディ《グローリア》に出演し、マンハイム国立劇場ではデーテルフ・ギアナーツ《冗談、風刺、皮肉そして深遠な意味》の新演出上演で鬼の役を歌った。復活祭の前の聖金曜日には、ゲオルク・クリストフ・ビラー指揮ライブツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団および聖トマス合唱団とトマス教会でバッハ《ヨハネ受難曲》に出演。6月には、ライン・ドイツ・オペラのモンテヴェルディ連続公演の一環として《ウリッセの帰還》のピサンドロ役で舞台に立つ。



五郎部俊朗
(テノール/アリア、第2の証人)
Toshiro Gorobe, Tenor

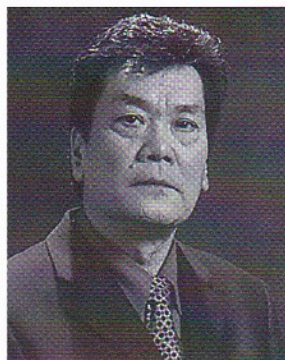
北海道教育大学卒業。リア・グアリーニ、カルロ・カメリーニ、五十嵐喜芳、伊藤宣行、町井幸子、萩原尚文の諸氏に師事。1986年渡伊、同年ベニアミーノ・ジョーリ国際声楽コンクール3位をはじめ、87年ヴィニヤス、88年第3回マリア・カラスなどの各国際声楽コンクールで受賞・入選し、第20回トーティ・ダル・モンテ国際声楽コンクールで第1位、89年第35回トゥールーズ国際声楽コンクールで第2位。第5回マリオ・デル・モナコおよび第8回ヴィルヴィエの各コンクールで第3位。1990年第9回チャイコフスキー・コンクールの声楽部門で「パッハ優秀賞」受賞。'92ロッシェニ国際オペラ・コンソルソ入賞。

1988年トレヴィーゾ市立劇場での「ラ・チェネレントラ」のドン・ラミーロでオペラ・デビュー後、コルトーナで「セビリアの理髪師」、ピストイアで「ファウスト」、スイスのビール市立劇場の「ドン・ジョヴァンニ」「魔笛」などに出演。

1990年秋帰国し、11月に藤原歌劇団の「ドン・ジョヴァンニ」のドン・オッターヴィオで日本でのオペラ・デビューを飾り、続いて「ラ・チェネレントラ」で絶賛を博した。その後も「夢遊病の女」のエルヴィーノ、「セビリアの理髪師」のアルマヴィーヴァ伯爵で成功を収め、1996年には「東洋のイタリア女」(日本初演)のゾンゾンで好評を博す。また藤原歌劇団の千葉公演や文化庁青少年芸術劇場公演などの「愛の妙薬」のネモリーノでも高い評価を得ている。新国立劇場には1998年「セビリアの理髪師」(藤原歌劇団共演)でデビューし、2000年公演にも出演。2001年7月藤原歌劇団「イル・カンピエッロ」の出演。2002年では「小鳥売り」「フランスへの旅」、2003年は藤原歌劇団公演「イタリアのトルコ人」等のオペラに出演し好評を博している。

その他、〈東京の夏〉音楽祭「なり行き泥棒」、東京フィル・コンチェルトンテシリーズ「アルジェのイタリア女」「ワールド・オブ・モーツァルト」、NHKニューイヤーパーオペラコンサートなど各種コンサート、「カルミナ・ブラーナ」「第九」のソロなどで活躍し、リサイタルも開催。特にロッシェニやモーツァルト、ベッリーニの作品を得意とするレジェーロ・テノールで、軽やかな高音は独特な魅力を醸し出している。また、「藤山一郎とその時代」と題し戦前、戦中、戦後と美しいメロディを、美しい声で歌い歌の楽しさを教えてくれた藤山一郎のレパートリーを再現したコンサートをCD発売と共にに行い全国各地で大変な反響を呼んでいる。その後このコンサートは「歌は美しかった」のシリーズとして他の昭和歌謡歌手の作品にも広がりCDも現在4枚リリースしている。他にレコーディングではシューベルトの「冬の旅」、「舞踏への誘い〜イタリア歌曲の世界〜」、「日本のうた」がある。

1985年「音楽現代」優秀賞受賞、第19回ジロー・オペラ新人賞受賞。藤原歌劇団団員。



小松英典
(バリトン/アリア、ユダ、ペテロ、ピラト、祭司(36a))
Hidenori Komatsu, Baritone

1975年、ハンブルクで宮廷歌手アーノルド・ヴァン・ミルに師事。1976年、リューベック国立音楽大学に入学。宮廷歌手エディット・ラング、ルネ・コロらに師事。1980年リューベック国立音楽大学リート・オラトリオ・オペラ科を卒業。

1982年秋、ハンブルクを中心にブラームスの「美しきマゲローネのロマンス」によるリサイタルを行う。

翌1983年1月、マドリッドでブラームスの「ドイツ・レクイエム」を歌い、またドイツ各地でシューベルトの「冬の旅」によるリサイタルを行った。同年4月、ベルリンでディートリッヒ・フィッシャー=ディエスカウと共演。その他にもアーリーン・オジェー、エリー・アメリング、ハンナ・シュヴァルツ、クルト・モルなど著名な歌手と共演し、ザルツブルク音楽祭などヨーロッパの主要なフェスティバルにも参加している。オペラでもハンブルク、リューベックその他のドイツの名オペラ劇場に客演し、多くの作品に出演している。

1990年には、R.シュトラウスの「サロメ」(ヨカナン)、翌1991年ブッチェニの「マノン・レスコー」、1993年ベルリオーズの「ファウストの劫罰」(メフィストフェレス)、1999年ベルリオーズの「ファウストの劫罰」(ブランデル)、2002年ベルリオーズの「レリオ」において、それぞれ小澤征爾の指揮で出演、絶賛を浴びた。

また、1992年2月に東京芸術劇場にてリサイタル「小松英典マラーを歌う」、1994年9月に東京をはじめ各地でエディット・マティスとデュオ・リサイタル「シューマンのタベ」、1997年10月・11月にシューベルト「冬の旅」を、2002年3月にシューベルトとブラームスの歌曲を取り上げ、東京オペラシティで公演、絶賛を博した。ドイツ歌曲の第一人者としての評価は不動のものとなっている。

レコーディングでの活動も目覚ましく、ブッチェニの「蝶々夫人」(シノーポリ指揮、フレニ、カレーラス:ドイツ・グラモフォン)、「日本歌曲」(ガーベン:ピクチャー、フォンテック)、「世界の歌」(モル、ファズベンダー:ピクチャー)などを録音しており、ファズベンダーとのデュエットCDはドイツ、フランスでレコード優秀賞を獲得した。また、ドイツ・CPOレーベルからエディット・マティスとのデュエットCDを、NAXOSレーベルからマラーのオーケストラ歌曲集(ガーベン指揮、北ドイツ放送ハノーヴァー・フィル管)のCDをリリースしている。2000年にはシューベルト3大歌曲集を録音した他、イェルク・デームスとともにブラームス歌曲集をCDに録音した。

ドイツ連邦共和国政府より永久プロフェッサーの称号を授与。プレーメン国立音楽大学教授。



合唱指揮
佐々木正利
Masatoshi Sasaki

東京芸術大学声楽科卒業。同大学院修士及び博士後期課程修了。1973年にバッハ・クリスマス・オラトリオの福音史家で楽壇デビュー。79年ドイツに渡り、80年第6回ライプツィヒ国際バッハ・コンクール声楽部門第5位入賞。同年より82年までデットモルト北西ドイツ音楽大学に学ぶ。在独中は欧州各国の演奏会に招かれ、特に80年ウィーン楽友協会ホールでのマタイ受難曲では『若き日のP・シュライヤー』と新聞各紙で絶賛される。帰国後も世界、日本の著名オーケストラのソリストとして起用される。また世界的バッハ指揮者であるH.ヴィンシャーマン率いるドイツ・バッハゾリステンの演奏会を初め、幾多の演奏会に出演して信頼を勝ち得ている。85年ザルツブルク音楽祭に招かれ、バッハ・マニフィカト等で絶賛を博した。現在までリサイタル21回を数え、レコード・CDも多数リリース、またテレビ、FM等にも度々出演している。

70年東京芸大バッハ・カンタータ・クラブの創設に携わり、多くの後進を育てるとともに指揮者としての活動を開始。以後、約30年にわたって主

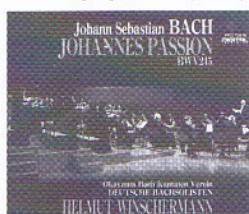
に宗教曲の演奏に力をみせ、そのいずれもが名演の誉れ高い。特に盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団等を率いての9度にわたるドイツ等への公演では『シュッツ、バッハの世界的担い手』とした最大級の賛辞が新聞各紙に掲載される。94年長年にわたる顕著な演奏・教育の業績に対し、第47回岩手日報文化賞(学芸部門)が贈られ、00年8月にはアメリカ・イオンド大学より名誉博士号が授与された。岩手大学教育学部音楽科教授。二期会会員。日本教育大学協会全国音楽部門大学部会副部会長。日本声楽発声学会理事。日本発声指導者協会常任理事。仙台バッハ・アカデミー理事。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団、岡山バッハ・カンタータ協会、岩手大学合唱団、東北大学混声合唱団、オーケストラ・アンサンブル・金沢合唱団、21合唱団(東京)各指揮者。

人類の至宝ともいふべきこれらバッハの畢生の大作群。ヴィンシャーマンの到達した愉悦と情愛に満ちた世界で…。『保存盤』です!

Helmut WINSCHERMANN

ヘルムート・ヴィンシャーマン 指揮
ドイツ・バッハゾリステン 岡山バッハカンタータ協会

絶賛発売中



●J.S.バッハ:ヨハネ受難曲 BWV245 ライヴ・イン東京(1995)サントリーホール

ヘルムート・ヴィンシャーマン(指揮) ニルス・ギーゼケ(福音史家:テノール) / 三原剛(イエズス:バス) / バーバラ・シュリック(ソプラノ) / 小見佳子(メソ・ソプラノ) / 河野克典(バリトン) 岡山バッハ・カンタータ協会 / 佐々木正利(合唱指揮) / ドイツ・バッハゾリステン (1995年11月9日 東京・サントリーホール / ライヴ録音)
WWCC-7288〜89 (2枚組) ¥5,096 (税込)



●J.S.バッハ:ロ短調ミサ曲 BWV232 ライヴ・イン・ジャパン

ヘルムート・ヴィンシャーマン(指揮) バーバラ・シュリック(ソプラノ) / ベルンハルト・ラングウアー(カウンターテナー・アルト) / 佐々木正利(テノール、合唱指揮) / 河野克典(バリトン) 岡山バッハ・カンタータ協会 / ドイツ・バッハゾリステン (1998年11月22日 岡山シンフォニーホール / ライヴ録音)
WWCC-7341〜42 (2枚組) ¥5,250 (税込)



●J.S.バッハ: クリスマス・オラトリオ BWV248

ヘルムート・ヴィンシャーマン(指揮) 天羽明恵(ソプラノ) / 井坂 恵(アルト) / 吉田浩之(テノール) / 大澤 建(バス) / 岡 順子(ソプラノ・エコー) 岡山バッハ・カンタータ協会(合唱) / 佐々木正利(合唱指揮) / ドイツ・バッハゾリステン (2000年12月2日 東京オペラシティコンサートホール / ライヴ録音)
WWCC-7407〜8 (2枚組) ¥5,250 (税込)

LIVE NOTES

ライブ・ノートは、
ナミ・レコードの
音のブランドです。

●制作・発売元:
ナミ・レコードCo., Ltd.
Tel 03-3440-5542
(CD受注専用FAX)
03-3440-5401

岡山バッハ・カンタータ協会

12/3大阪

1987年、バッハの合唱音楽の演奏を目的に結成。日本を代表するバッハ演奏のスペシャリストである佐々木正利氏を指揮者に迎えて現在に至る。

1994年、東京カザルスホールでの演奏会では“真摯で正攻法の演奏”“明快なフレージングとはっきりとしたドイツ語発音による豊かな表現力”との高い評価を獲得し、ソロも全て団員が受け持つゾリストンとして確立する。

バッハ演奏の世界的権威であるヘルムート・ヴィンシャーマン指揮ドイツ・バッハゾリストンと、1993年「マタイ受難曲」、1995年「ヨハネ受難曲」、1998年「口短調ミサ曲」、2000年「クリスマス・オラトリオ」を岡山、大阪、東京等で共演。いずれもこの

ライブCDが発売されている。他、イギリスのパロックプラスやアンサンブル金沢等と共演。2000年「クリスマス・オラトリオ」の演奏に対して第2回岡山県芸術文化賞グランプリを受賞。1997年ドイツ、オーストリア演奏旅行。次いで2001年8月には、バッハゆかりのライブツィヒ・聖トーマス教会と、世界遺産の町・クヴェトリンブルクのシュテフツ教会でライブツィヒ・パロックオーケストラと共演。

合唱指揮者 大塚 博
ピアニスト 大熊直子

SOPRAN I

板野 陽子
大庭 雅子
風間 真理
黒住 恵
小島 裕子
実成 文
新谷 葉子
武田 美樹
玉垣夫規子
丹原 由理
出口 裕子
長尾 節子
新田 一枝
野田 淳子
平松 英子
藤田 恭子
山本 温子
最所 養子

SOPRAN II

井上 令子
遠藤賀代子
岡崎 順子
岡野 美絵
奥村 礼子
金子 晴美
小前 珠緒
柴山 陽子
広田 准子
平松加七子
福田 順子
松本 園
柳井むつみ
山下愛山子

ALT I

太田 陽子
河原井蔦枝

小西 和美
小山 邦枝
坂本 新子
霜山 瑞穂
友保美代子
虫明 和子
茂木 雅美
森神奈津恵
山田 宏美
横田久里子

ALT II

行地 知子
草薨 裕子
剣持美和子
小橋 晴美
坂本真理子
左近 恵美
永田美知子

原田日眞子
村山 紀子
矢内 淑子
薮井 由佳
山本 栄子
脇本 恵子

TENOR I

及川 豊
奥井伸二郎
草薨 隆文
栗原 稔
佐々木幹雄
佐藤 友哉
林 真一
松本 敏雄
水越 啓
山崎 泰弘
吉村 哲

TENOR II

有馬雄二郎
大熊 政次
小野 正人
鏡 貴之
藤原 康弘
山下 和宏
吉本 大博

BASS I

阿部 学
池田祥一郎
井上 清光
薄井 正孝
小原 一穂
日下不二雄
坂本 卓也
佐々木直樹
田辺 真一

前島 岐仁
吉武 晃

BASS II

小野 敏彰
小峪 祥孝
坂本 尚史
千田 敬之
高江洲義寛
高原 景介
難波 晃
吉田 幸弘
横山 泉



盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

11/30盛岡 12/5東京

1977年「カンタータを歌う会」として発足。以来、一貫してJ.S.バッハの作品を中心としたドイツ・バロック合唱曲の研究、演奏を行っている。その演奏が、1991年ドイツにおいて「作品の語感、音、そして精神の完熟」という現地新聞の批評を受けるに至るまでには常任指揮者、佐々木正利のドイツ・バロック音楽に対する卓越した見識に基づく、熱意溢れる指導の積み重ねがあった。佐々木は超一流のエヴァンゲリストとして評価されるその発音、語感、様式感をもう一つのライフワークである合唱団の育成に注ぎ込み、その結果「言葉が生きる」と「音楽が生きる」とは歌の世界では同義語である」というフェラインの音楽信条が演奏上の身上となるに至ったのである。

その後、H.ヴィンシャーマン、H.J.ロツチュ、J.ツィルヒ、岩城宏之等、世界的指揮者との共演を重ね、各指揮者より、ドイツ・バロック音楽を音楽的かつ人間的に表現できる合唱団として、熱い評価を得るようになった。この評価は、声の充実を追求

する合唱団や、古楽器的な歌唱法を駆使して鮮烈な表現を目指す合唱団に与えられるものとは性格を異にする。暖かい音色を基調としながら、音楽の刻々と変化する様相を、その時々に対応しいニュアンスで大胆かつ繊細に、確信を持って表現しきろうとする、あくまで人間バッハへの共感を基調とする合唱団に対してのものなのである。

ミュンヘンのヘラクレスザールでハイドンの「天地創造」を演奏する(ニュルンベルク交響楽団)同じ週に、各地教会でア・カペラの小品を歌う。フェラインは、常に盛岡の教会での練習で培ったトーンを原点として活動してきた。

2000年11月には、盛岡でH.ヴィンシャーマン指揮のドイツ・バッハゾリステンと、バッハの「クリスマス・オラトリオ」を全曲演奏し絶賛を博した。また昨年10月には、ライブツィヒ・バロックオーケストラとヴィヴァルディ「グローリア・ミサ」他を共演し、古楽器との絶妙なアンサンブルを醸し出した。

指揮者 佐々木正利 伴奏者 剣持 清之

SOPRAN I
赤塚 温子
浅沼 寛子
阿部 淑
阿部未佳子
阿部友紀子
大川 敦子
小笠原香澄
小野寺貴子
菊池 節子
熊谷 充代
斎藤 純子
佐藤 千砂
佐藤 美紀
高橋 聡子
丹野 貞子
千田 絵未
奈良めぐみ
北郷 博美
本良いよ子*

横内 愛理
渡邊 絵美

SOPRAN II
荒田 奈美
五十嵐祐子
磯部真理子
大石 敦子
大嶋美奈子
阿野美映子
小澤めぐみ
尾友 佳子
加藤 真香
佐々木玲子*
佐藤 詩織
高橋 美織
高橋 祐圭
田口千紗都
田村いずみ
千葉明日香

成田 茜
成田 和代
羽田 康子
藤澤 智子
松尾光穂子
三原 佳織
渡辺真理子

ALT I
阿曾 万里
小川 曉美
小川 皖子
小野寺洋子
兼田紀美子
桐原 絹子
児玉 尚美
齋藤 貴子
佐々木美智子
佐藤 信子
佐藤 恵

柴田 映子*
杉本 絵美
鈴木栄見子
鈴木 英美
多田 蘭子
原 穂波
平井 良子
茂木 雅美+
茂木 容子
谷地畠品子
渡辺しをり

ALT II
東 加奈子
大友麻紗子
小澤かおる
菊池 葉子
草薙 裕子+
今野 早苗
坂本真理子+

佐藤 公
高橋 温
武田 敏恵
丹野 まり
千葉ゆつき
永田美知子+
廣瀬利津子
水野 千恵
村元 彩夏

TENOR I
小川 隆弘
柿崎 倫史
草薙 隆文+
佐々木朋也
佐々木幹雄
柴田 幸吉
羽田耕太郎*
福岡 孝悦
吉村 哲

TENOR II
太田 颯則
小野 正人+
鏡 貴之
加藤 照道
徳山 欣也
新山 隆健
三原 正敏
目黒 賢哉
森 順一

BASS I
阿部 学
稲邊 督
大宮 一弥*
小原 一徳
木下 剛*
後藤 頼男
佐々木直樹
田沢 隆

西野 真史
大和 敏憲
吉田 俊彦

BASS II
赤塚 貴史
後藤田篤夫
佐久間良樹*
下田 潤
高江洲義寛+
高橋 聡
千田 敬之
芳賀 郁夫
藤村 誠毅
横山 泉
渡辺 信之

* 仙台宗教音楽合唱団
+ 岡山バッハ・カンタータ協会
(11/30盛岡公演出演者は、
別冊を参照)



盛岡バッハ・エンジェル・コーラス

0311/30盛岡



ドイツ・バッハゾリステン「マタイ受難曲演奏会」のための児童合唱団として、2003年に結成される。盛岡市を中心とする小学生、中学生、高校生及び一般の児童合唱団員により構成され、メンバーの所属する学校又は団体の指導者の殆どが盛岡バッハ・カンタータ・フェラインに在籍した経験を持つことから、発音、発声、様式感等に高い統一性を持ち、盛岡バッハ・カンタータ・フェラインとの相性も抜群である。

大阪すみよし少年少女合唱団

0312/3大阪



1974年創立の大阪を代表する少年少女合唱団である。定期演奏会は毎年開催しており、創立30周年を迎える来年には記念演奏会を予定している。海外での演奏も多く、2001年には大阪市の姉妹都市サンクトペテルブルグで「新世紀の友情を運ぶ友好演奏会」を開催し、好評を博している。

TOKYO FM少年合唱団

0312/5東京



1985年創立。現在、日本で、小学生男子のみがメンバーの「少年合唱団」は大変稀で、ボーイソプラノにこだわりつづける合唱団の実力・実績は、日本だけでなく海外でも高く評価されている。約60名の団員がおり、定期演奏会ははじめオペラやコンサート、CDレコーディングやCM、番組出演など、幅広い活動を行っている。

「われらの主イエス・キリストの受難、福音書記者マタイによる。
ヘンリーツィ氏、別名ピカンダーによる歌詞。G.S.バッハの音楽。
第1部」

これがバッハ自身によって記されたこの曲のタイトルである。
1736年、初演から9年後にバッハが自筆で清書した総譜のタイ
トルページに書かれているもので(ヨハンのJはイタリア風にG
と表記されている)、この自筆総譜は、美しい楽譜で知られている
彼の残された楽譜の中でもとりわけ美しいものである。

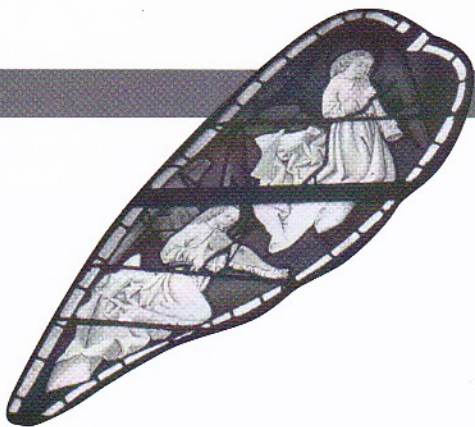
今日では『マタイ受難曲』と称されるこの曲は、新約聖書の4つ
の福音書のうちユダヤ教徒であったマタイという福音書記者(使
徒の一人マタイとは別な人物)によって書かれた福音書における
イエスの受難の記事に音楽付けをしたものである。しかし歌詞(テ
キスト)はそれだけではなく、その記事をもとに生じる様々な想い
を表現した、ピカンダー(本名Ch. F.ヘンリーツィ)による自由詩や、
プロテスタント教会で重要な位置を占めるコラール(賛美歌)も用
いられている。

今から280年ほど前の1727年の受難節、聖金曜日にあたる4月
11日にライプツィヒの聖トーマス教会で初演されたこの『マタイ
受難曲』は2つのオーケストラ、2つの4声体による合唱、4人の
ソリスト、そして福音書記者とイエスという非常に大きな編成を
している。2群のオーケストラと合唱を要するのは、ピカンダー
の書いた自由詩によるところが大きい。ピカンダーは第1グルー
プを旧約聖書で用いられている「シオンの娘」に、第2グループを
「信ずる者たち」に喩えて詩を構成している。これは前者が受難の
ドラマに間近に立ち会う者の後者はその報告に接しながら事態
を案じる会衆の役割を基本的に担っている。また、全部で15ほど
挿入されるコラールはバッハ自身によって選択され和声付けさ
れたものである。

『マタイ受難曲』のテキストは、その役割から3種類に分類され
る。3種類とは、まず福音書そのものの文言である聖句、次に受難
記事から生じた想いをピカンダーが表した自由詩、そしてプロテ
スタント教会に伝統的な共同体の音楽であるコラールである。こ
れらは位置づけがそれぞれ異なり、3つの層とみなすことができ
る。

基本層を成すのは聖句(つまり福音書記者マタイによる記事)
である。バッハは聖句を福音書記者(エヴァンゲリスト)やその他
の登場人物(イエス、ペテロ、ピラト、祭司長、祭司・律法学者たち、
群衆、女中等)に分担させながら、受難の物語を進行させている。
これはプロテスタント教会音楽の伝統に則ったものである。また、
これらの文言はバッハの自筆譜では朱書きされており、他の歌詞
とは明確に区別され、大切に扱われていることがわかる。聖句は、
基本的にレチタティーヴォ・セッコ(伴奏の通奏低音を短く切って
演奏する様式)で歌われ、拍子は福音書記者やその他の登場人物の
語るような口調にまかされている。その中でイエスのことばだけ
はレチタティーヴォ・ア・コンパニャート(伴奏つきレチタティー
ヴォ)で作曲され、弦楽による伴奏が付されている。その効果はま
るでイエスが光輪を背にして語っているようである。また、群衆
など複数の人物による言葉の場合は基本的に合唱を利用している。

第2層にあたるのは自由詩である。ピカンダーのいくつかの宗
教的な詩集から(おそらくピカンダーとバッハとが相談し一部改
作しながら)選択された自由詩は、アリオソ(レチタティーヴォ・
ア・コンパニャート)とアリア、及び大規模な合唱(冒頭や終末に登
場する)で作曲されている。この自由詩の部分では、受難のドラマ
すなわちイエスが捉えられ十字架につけられて死に至るストー



リーの中で、それぞれの場面を目の当たりにした個人の心情が歌われるのである。また聖句で示された受難物語のそれぞれの場面に関するバッハなりのアフェクト(情感)が、さまざまな楽器の組み合わせや音型の工夫によって表現される。

第3層としてコラールが位置する。コラールはプロテスタント教会にとって重要な位置を占めてきたもので、教会に集う会衆にとってなじみ深い旋律である。ここでは、自由詩による個人的な心情に対して、教会に集う会衆の共同体としての心情あるいは受難の物語を見つめる信者としての心情が歌われる。バッハの生い立ちからの環境のなかで常に耳にし親しんできたコラールが、場面の要所要所で回顧し内省へと向かう休止点として登場する。また、冒頭の合唱曲や中間部のアリアにも付随してコラールが取り入れられていることや、アリアの器楽パートや群衆の合唱の中にすら部分的にコラールの旋律が隠されていることからみても、コラールが『マタイ受難曲』全体の音楽的統一を創り出していると言っても過言ではない。

基層を成しているテキストはマタイによる福音書の第26,27章の全文である。これはユダヤ教の祭の一つである過越祭を2日後に控えた日、イエス自身の受難について予告する件から始まる物語である。いくつかの出来事が展開するが、ここでは聖書の項に従って19の場面に分け、第1部、第2部の開幕および全編の閉幕の合唱曲というように、22に区切ってその筋と音楽的な特徴を述べる。

(1)開幕の合唱

2つの合唱とオーケストラのすべてを使い、さらにコラール旋律としてリピーエノ(多くは児童合唱が受けもつ)も参加する壮

大な規模の曲である。おのれの死を迎えるためにイエスがロバに乗ってエルサレムに入場する、そんな足取りにも似た12/8拍子(ホ短調)。第1グループと第2グループが「見よ!」「誰を?」「花婿イエスを!」と問答しながら、これからイエスの身に起こる嘲りや忍耐そして十字架への磔等が示される。

その問答にリピーエノが歌うコラールが重なる。このコラールは『マタイ受難曲』の中心主題、すなわち「罪なき神の子羊イエスが私たち人間のすべての罪を負って十字架上のいけにえとなられたこと」をはっきりと歌い示す。

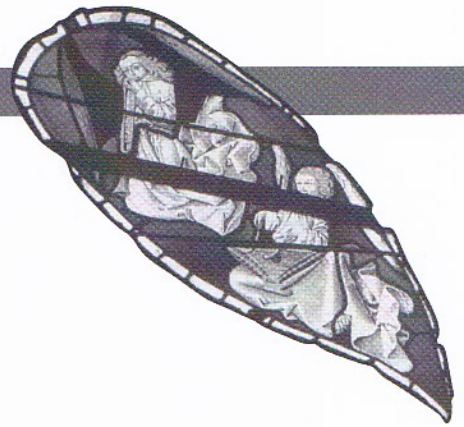
(2)イエスを殺す計略

続くレチタティーヴォから物語は動き出す。はじめは、半音階上向音型いわゆる「受難のモチーフ」を伴ったイエスの、自らの受難を予告する言葉。コラールでは、「罪を犯していないのになぜ裁きを受けなければならないのか。」と、受難の不条理さが提示される。

一方、祭司長や律法学者、民の長老たちが大祭司カヤパ邸に集まって暗殺計画を練っていた。ここでの合唱は、民衆に騒ぎが起こることを憂慮する彼らの言葉である。

(3)ベタニアで香油を注がれる

昼間にエルサレムの街でユダヤ教の聖職者たちを次々と論破してきたイエスには常に身の危険がつきまっていたので、彼は弟子とともに夜になると郊外の村に身を隠していた。そんな村の一つ、ベタニア村のライ病人シモン家で一人の女が高価な香油をイエスに注いだのを見て、弟子たち(合唱)は「無駄遣いだ!」と責める。しかしイエスは「わたしの葬りの用意なのだ。」と弟子たちを諭しその女性を擁護する。これを受けてアルトのレチタティ



ーヴォでは香油を「涙」に置き換え、救い主に対する愛情を示す。そこではフルートのデュオによる涙のしたたりを表す音型が用いられ、それは次のアリアに引き継がれる。女を責めたことと同じ価値観を持っている自分を懺悔し、その悩みの「涙」が香油の代わりになりますようにと願いながら、イエスをいとおしむ。

(4)ユダ、裏切りを企てる

他方、12弟子の一人ユダは祭司長の所に行き、イエスを裏切る相談をしていた。それを受けてソプラノのアリアではすすり泣くようなため息の音型を使いながら、ヘビすなわち悪に身を売ってしまった弟子の一人ユダへの悲しみを歌う。ヘビという言葉には長いメリスマ(同じシラブルをいくつかの音符にわたって歌うこと)が付されている。

(5)過越の食事をする

場面は一転してユダヤ教の過越祭を待つのだかな雰囲気になる。弟子たち(合唱)は「どこに食事の用意をしましょうか？」と問い、イエスは「都のかねてから話してある人に言いなさい。」と答える。そして食事をしている時、イエスは弟子の裏切りを予告する。ここでも受難のモチーフが使われ、不穏な空気が漂う。ユダを除く11人の弟子(合唱)が「まさか私ではないでしょう？」とイエスにたずねる。そこでコラールが「それは私です。私こそ…」と会衆一人一人の心の弱さが歌われる。続けてユダが同じようにたずねると、イエスは「あなたの言うとおりで。」と答える。ここでは裏切ったユダに対するイエスの沈む心を感じる。

(6)主の晩餐

再び安らいだ雰囲気に戻り聖餐の場面となる。続くソプラノの

レチタティーヴォでは イエスの死を前に不安な表情から次第にやすらぎへと向かう。アリアでは舞曲のリズムにのりイエスの身体とされるパンや血とされるぶどう酒を自分の身体に取り込むことの喜びを歌う。

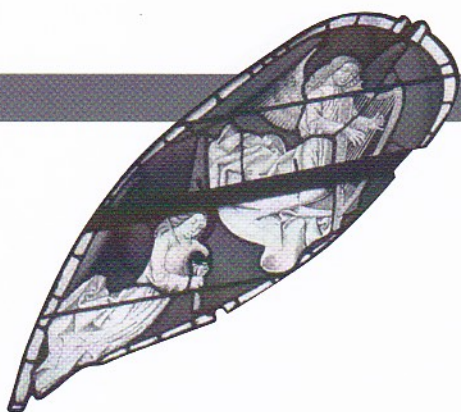
(7)ペトロの離反を予告する

場面は食事の後、夜のオリーブ山に移る。そこでイエスは始めに今夜の弟子たちのつまずきを予告する。「羊飼いは羊の群を打ち…」というゼカリヤ書からの引用の言葉には、「打つ」ということばにスタッカートをつけ、打ちつける様を表す。パッハはここに「私を守り、あなたの群に加えて下さい。」とコラール(ホ長調。この旋律は一般に「受難コラール」と呼ばれる。)を挿入し、会衆の心情を代弁している。

しかし続けてイエスはペトロのつまずきを予告する。ここでは、ペトロも他の弟子たちもそして続くコラール(変ホ長調の受難コラール)によって「私も」つまずき立ち去るようなことはないかと答え決意する。

(8)ゲッセマネで祈る

舞台はゲッセマネの園と呼ばれるところに移る。イエスは憂いを帯び、弦楽伴奏は不安から来るふるえを表す。テノールは不安を表す通奏低音の細かなリズムにのせてイエスの苦しみを報告し、合唱(第2グループ)はそれに答えてコラールを使って静かに罪の告白をする。同じコラール旋律は他に2ヶ所で使われているが、いずれも「イエスに罪はなく、私こそが罪人である。」という告白である。続くアリアでは「目を覚ましておれ。」というイエスのことばを受けてテノールが「私が主のそばで目を覚ましていよう。」と歌い、合唱が11回(裏切り者のユダを除く弟子の数)「そうすれ



ば私たちの罪が眠りにつく。」と合の手を入れ、イエスのことばの意味を考察する。

再びイエスはひれ伏して父なる神に祈る。この祈りのなかで語られるイエスの苦悩をバスがレチタティーヴォで解説し、喜んで主の御心に続く意志を示すのがアリアである。

一度弟子たちの所に戻り眠りこけている弟子たちを叱った後、イエスはもう一度祈りをささげる。コラル(口短調)が「神の意志はいつも最良のものである。」という確信を告げる。

(9)裏切られ、逮捕される

再び眠っている弟子を見てから三度目の祈りを捧げ、戻ってくるとユダ及び祭司長や長老たちに差し向けられた群衆が登場しイエスは捉えられる。これを見てアルトとソプラノの模倣を基調としたデュエットがこの不条理に対する心情を通奏低音抜きの不安な雰囲気の中で歌う。その最中「放せ、待て、縛るな!」と第2グループの合唱が訴える。

すると一転して激しいフーガとなり、第1、第2グループが一緒になって怒りを爆発させる。その怒りをぶつけるかのように、イエスのそばにいた一人が剣を取り大祭司の僕に斬りかかって行く場面へと移行する。イエスはそれを論すが、弟子たちは結局イエスを見捨てて逃げ去ってしまった。ここでは「たとえともに死ぬようなことになっても、あなたを知らないとは言わない、とすべての弟子たちが言った。」と同じ音型を用いることによって、人間の弱さを浮き彫りにし、第1部閉幕のコラルへと移行する。

器楽伴奏が付き、リピーエノが定旋律に参加しての大規模なコラルで第1部が閉じられる。ここではキリストが降誕し、人の罪を購うために十字架につけられるのだというキリスト教の教義の中心が歌われる。

(10)第2部開幕

第2部はイエスを失って茫然自失のシオンの娘が主を探し求めるというアルトのアリアから始まる。合唱はそれに寄り添い、「共に探しに行こう」とその不安を和らげ包み込むように語りかける。

(11)最高法院で裁判を受ける

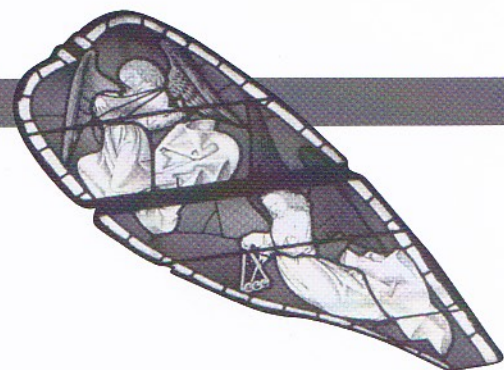
第2部最初の舞台は大祭司カヤパ邸。ユダヤ教の聖職者たちによる予備裁判の場面。偽証をもってイエスを死刑にしようとするがその証拠が見つからない。そこにコラル(変口長調)。これはイエスの心情とも信徒の心情とも解することができる。

そこで2人の者が証言するがイエスは黙っていた。この姿についてテノールはレチタティーヴォで解説し、続くアリアでは迫害の中での忍耐の大切さを歌う。ここでは通奏低音に鞭打ちを表す付点のリズムが用いられている。

さらに大祭司は言葉のわなをかけ、イエスが堂々と自分がキリストであることを認めると、とりまきの聖職者たち(合唱)は激しい口調で「彼は死刑に当たる。」と口々に言い、つばを吐きかけ、こぶしで叩き、平手で殴ってさらにあざける。この様子をただ見ているしかない会衆は「…あなたは決して罪人ではありません。…私たちと違って罪とは何の関わりもないお方です。」と受難コラル(へ長調)を歌う。

(12)ペトロ、イエスを知らないという

カヤパ邸の中庭に目を移すと、イエスのことが気になったペテロが来て座っていた。彼は女中2人に詰問されるが2度とも「わからない。」「しらない。」と否認する。近くにいた人々(合唱)も口を揃えて詰問する。するとペテロは3度目の否認をしてしまう。するとすぐに鶏が鳴き、イエスの予告を思い出す。ここでアルトの



アリアがペテロの心情、すなわち人間の弱さを歌う。しかし続くコラール(イ長調)で会衆は「私」の罪を越える神の恵みと恩寵を認識する。

(13)ピラトに引き渡される

翌日になり、イエスを死罪にするためユダヤ教の聖職者たちは総督ピラトのもとにイエスを連れていった。この短い報告はすぐに次の場面へと続く。

(14)ユダ、自殺する

連れて行かれるイエスを見て、ユダは裏切ったことについての後悔の言葉をユダヤ教の聖職者たちにもらすが、彼ら(合唱)は「自分たちには関係がない。」と冷たく突き放す。そこでユダはその後悔から自殺することになる。続くバスのアリアはト長調で明るささえ帯びている。この点について磯山雅氏は、ピカンダーの歌詞に出てくる「迷える息子」の表象をルカによる福音書に出てくる放蕩息子のたとえと合わせて考えることで、裏切り者であるユダを「悲惨の中から本当の信仰を知り、悔いて神に迎え入れられる人」として扱おうというピカンダーとバッハの卓越した解釈であり、ペテロへの許しとユダへの許しは一对を成すのではないかと述べている。

(15)ピラトから尋問される

総督ピラトによる尋問に対しても、イエスはほとんど反論することなく黙っていた。そこで挿入されるコラールは受難コラール(ニ長調)で、イエスのように父なる神に全てを任せよ、という信者への教えである。

(16)死刑の判決を受ける

そこでピラトは、祭の慣例としての恩赦の対象をイエスにするか極悪人として捉えられていたバラバにするか聖職者たちに尋ねた。すると彼ら(合唱)は一齐に「バラバを！」と叫び、イエスを「十字架につける！」と口々に言った。続けて、この選択に対する驚きがコラール(ロ短調)によって歌われる。

ピラトが「彼は何をしたというのだ？」と自問するとソプラノのレチタティーヴォが、イエスが行ってきた善いことを語る。続くアリアではこの『マタイ受難曲』の中心主題、すなわち、「愛の御心から救い主が死んでゆく…」と歌う。このアリアは通奏低音を欠くことで、眼前に展開している荒々しく狂気に満ちた光景から浮き出た清らかさに満ちており、F.スメントによって『マタイ受難曲』における構造と内容から見た「心臓部」ともされている。

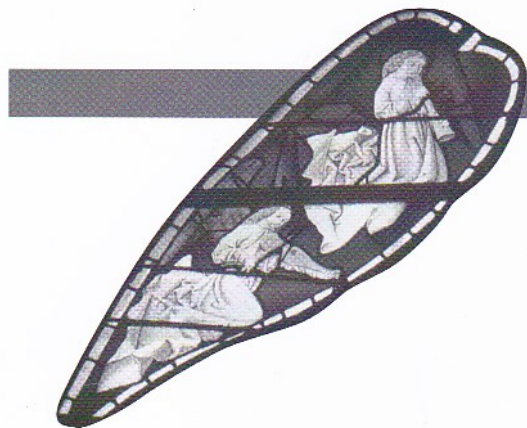
群衆はさらに「十字架につける！」「われわれが責任をとる！」と叫ぶのでピラトはイエスを鞭打ってから彼らに引き渡した。アルトのレチタティーヴォは鞭打ちをやめるよう懇願し、アリアではその血潮を受けとるためにわたしの心を捧げますと告白する。

(17)兵士から侮辱される

すると今度は総督の兵士たちがイエスを徹底的に侮辱する。それを知った会衆は受難コラール(ヘ長調)をもってイエスの姿を非常に憐れみ悲しむ。

(18)十字架につけられる

兵士たちにゴルゴタの丘に連れて行かれる途中に出会ったキレネ人のシモンがイエスの十字架を担ぐのを見て、バスが十字架に対する想いを歌う。またアリアでは「進んで十字架を受け入れよう」と十字架の意味を肯定的に理解する方向へ転じる。



ゴルゴタの丘で十字架につけられた後もイエスはからかいと嘲笑を受ける。そのような丘の上のイエスを幻想的に見つめる歌がアルトのレチタティーヴォとアリアである。

(19)イエスの死

ついにイエスは最後の言葉を叫んだ後、死の時を迎える。イエスの言葉のうちこのことばにだけ弦楽の光輪が付されていない。取り巻きの群衆は未だ半信半疑でイエスを見続ける。ここで挿入される受難コラール(イ短調)では自分の死の時を想い、「いつか私がこの世から去るときも、私の側を去らないでください。」と歌う。

続いて起こった天変地異。ここに至って初めて人々は「まことにこの人は神の子であった。」と納得するのである。

(20)墓に葬られる

イエスの遺体が引き取られた夕方を、バツハはそれまでの血生臭さを一切排した清浄の雰囲気としてとらえていたのであろうか、バスのレチタティーヴォが「…神との間の平和が、イエスが十字架をまっとうされることによって結ばれた。…」と静かに歌いかける。アリアでは「胸の内にイエスを葬ろう。主は、いつまでもいつまでも私の内で安らかな憩いの場をお持ちになる。」と歌われる。

(21)番兵、墓を見張る

いまだイエスを神の子と信じない祭司長やパリサイ人らは、生前のイエスのことばを持ち出し、「3日目まで墓の番をするように命じてください。」とピラトに訴えた。そこで彼らは行って石の封印をし、番人をおいて墓の番をさせた。

(22)全編の閉幕

「私たちの罪のために苦しみ、受難の死を遂げたイエスに感謝を捧げます。」と、4つのパートのソリストが、かわるがわるイエスに呼びかけ、合唱が「私のイエスよ、さようなら。」と何度も語りかける。続いて、「私たちは涙ながらに跪き、お墓の中のあなたに呼びかけます。静かに安らかにお休みなさい。…」という壮大な合唱をもって全曲が締めくくられる。

3.4. Passio D. N. I. C. secund. Math. 24

Flauto
Oboe
Violino
Viola
Cello
Contrabbasso
Organo
Chorus

☐ KAJIMOTO CONCERT MANAGEMENT CO.,LTD.